

第9回 子どもの心を知って保育を創るⅣ(3歳児)

～ 自分にあまく・人にはきびしく ～



講師 岡村 由紀子 氏

1 体の発達

① 幼児の体と心のつながり

幼児は、体の調子が心に大きく影響します。体調が悪かったり睡眠不足だったりすると、ぐずる、けんかなどのトラブルが起きる、意欲的になれない、体を動かすことが嫌になる…といったことが起きます。そうならないように、生活リズムを作っていくことが大事です。

保護者には、「元気な体で登園できるように、生活を整えてほしい」ということを伝えます。園は、基本的に元気な子が来るところです。体調が悪い時、子どもは園で楽しく過ごせません。ですから、その時は保護者に連絡をして、お子さんを迎えに来てもらいます。子どものことを中心に考えると、そのような対処になります。

② 全身運動

膝のばねの力がつき、平衡感覚が育ったことで、ケンケンで進んだりピョンピョン跳んだりすることができるようになります。そこで、散歩の時にも、乳児と同じではなく、例えば畦道や坂道があるとか、ごろごろした道だとか、子どもの全身の運動機能が発達するような散歩コースを選択しましょう。生活道路の中にも、子どもの発達に役立つ場所があるわけです。

この時期は、自分の身体を自分の思い通りに動かしているという、自分に対する自信の根底を形作る大切な感覚が育っていきます。

③ 手指の発達

手指が発達するという事は、“自分のことは自分でできる力”の土台となります。2歳児まで

はなぐり書きですが、だんだんと○になってきます。これは、指先をコントロールする力が育つからです。折り紙を半分に折ることや、“お弁当しぼり”もできるようになってきます。

自分がこういうのを描きたいという思いを持ちながら描くことを、意図的表現活動と言います。それができるようになる頃です。また、手と目が協応し、手に持ったものをちゃんと口に運んだり、紙を持ってはさみで切ったり、といった動作もできるようになります。しかし経験の差が大きいので、どの子も経験できるように、例えば、紙とはさみを使ってカレーやアジサイを作るという遊びを取り入れることが必要です。また、のりを使うことは指先を動かすためにとても大事で、“手指を失業者にさせない”ために、安易にスティックのりを使うことは避けましょう。手指を動かすことは、脳の発達に大きな影響を与えます。

2 心の発達

① 反抗期

「やりたいけどやれない」…自分の中で、それが矛盾として葛藤する時代です。人のことはあまり関係なくて、自分のことばかりです。3歳児になると自分でできることが増えるので、ただの「いや！」から、理由のついた「いや！」になり、自分の思いを言えるようになります。しかし、その理由は自分の気持ちにかかわることばかりで、人のことはあまり関係ありません。ですから、自分に甘くなります。人のことを見るから、人のことを指摘し、会話も一方的になります。

“いばる”というのは、基本的に自分しか見えないからです。相手の気持ちを考えているわけではないのです。依存から自立したい過程にあって、まだ、相手のことが見えてこないのです。

こわいものしらずだから何でもやります。とても積極的な時代であり、その分、危険も伴います。確固たる自分が見えてくる4歳児に比べたら、まだ不安定な時期です。

② 認知（わかる力）

同じ言葉を使っている、持っているイメージが一人一人違います。例えば、犬の話をしていても、それぞれに自分が出会った犬の話をしていすから、話がちぐはぐになってしまうこともあります。

形の「同じ・違う」がわかる時期です。三角と四角は違うことや、友達の服と自分の服とは違うといったことがわかります。また「大きい・小さい」「長い・短い」や「こっちの方が重い」といった違いがわかり、基本色（赤・青・黄・緑）の区別もできるようになります。

また、ぶどうやりんごが“果物”であることがわかったり（メタ言語）、細長いものを見て「新幹線だね」と、見えないものが見えたり（象徴機能）するようになります。

「自分に甘く他人に厳しい」3歳児。この時の子どもの心は、「周りは見えない」…なのです。自分は着替えていなくても、友達の洋服を持ってきてあげたり、ボタンをはめてあげたりして、お節介をやきます。人への関心が薄い今の世の中にあって、これだけ他者に関心を持てる3歳児は素敵です。「自分のことをやっていない」と責めたら、人に関心を持つことを否定する指導になってしまいます。「〇〇ちゃんのことをお世話してあげるなんて、素敵だね。じゃあ今度は、自分のことができるかな。見ててあげるね。」と言いましよう。大人から見て困った時ほど、子どもは新し

い力を獲得する時なのです。

また、3歳児は、視点を変えることが難しいので、トラブルがよく起こります。トラブルは自我と自我のぶつかり合い。むしろ喧嘩をしない子こそ、気にしてあげましょう。喧嘩は“自己主張”です。自分が大事にしたいことがあるから、喧嘩も起きます。自己肯定感も、自己主張から育っていきます。ですから、どっちがいいか悪いかという指導ではなく、保育者は、「喧嘩は自己主張と他者理解のチャンス」という立場で指導します。まず、子どもの気持ちを聞き取る指導です。かんだりたたいたりしたことを尋ねるのではありません。そして、「次はこうしようね」を話してあげます。その指導の繰り返しです。喧嘩した時に「ごめんなさい」を言う子ではなく、「ごめんなさい」とはどういうことを考える子を育てましょう。この時、周りの子どもみんな見えています。先生の指導によって、周りも育ちます。まさに、“自己主張と他者理解”です。

大人も同じです。「地球船号」においても、違っていることを否定するのではなく、お互いに相手を理解して折り合いをつけることが大切なのです。この力が育つ入口が、3歳児の“自己主張”なのです。ですから、喧嘩をどう見るかが、保育の質に大きくかかわります。自分なりの思いを言葉にすることはできても、人の意見を聞いて自分の意見を作り出すことはまだ難しい時代だから、大人がそこで「今度はこうしようね」と言ってあげて、「我慢できたね」「素敵だったね」を伝えてあげたいです。

また、この時期、考える力がついてくるので、「どうして先生はそうなの？」「どうして〇〇ちゃんは泣いているの？」という質問が増えます。第2質問期です。

③ 我慢とは？

自分が自由に生きていく時、自分で自分を抑え

る力がないと、人は生きていけません。「あの人がやっていないから、ぼくはまだできないんだな」というふうに自分で考えていくこと。それが“我慢”です。言葉が生まれると、我慢する力も伸びます。我慢することは、自分自身の心と体の主人公になることなのです。

3 言葉の発達…言葉を通じて他者を知る・聞いてもらうことで言葉は育つ

聞く力を育てるためには、聞いてもらう経験が必要です。集団保育では、子どもの要求に対して、先生が「あとでね」と言う場面はありますが、その場合も「あとでね」の理由を言いましょう。「今、これを行っているから、これが済んだらね」と伝え、その後、言ったことを忘れないでいること。それが、先生との信頼関係につながります。

この時期の言語についての特徴として、

- ・使う単語数が増え、感情を伝える言葉には不自由しなくなる
- ・助詞・副詞の使用が増えて豊かな表現になる
- ・知的好奇心による「どうして・なぜ」が増える
- ・思った事を口に出すので、ひとりごとが増える
- ・悪い言葉を使うことで、相手の反応を見るといったことが挙げられます。

① 言葉とは

言葉には「コミュニケーション」と「思考言語」の2面があります。3歳児は「思考言語」というよりひとりごと（外言）で、思った事がそのまま外に出てきますので、自分で考えて返事をしていくわけではないのです。思考言語が独立し、自分の中で考えてから言葉にするようになるのは、4歳児くらいからです。小学校入学の頃には、頭の中で展開できる（内言）ようになります。これは、“間”を作って、言った言葉を自分の中に戻せるようになることです。

② 行動の調整について

3歳児以前でも、言葉で自分の要求や行動を抑えられるようになってきます。共感を土台にして発せられる言葉が行動を生み出し、行動を抑える上でも大きな役割を果たすのです。しかし、それは、その経験を何回も繰り返した後にやっと可能になることです。“体をくぐって思考をする”ことです。

4 生活…自分のやりたい気持ちを支えて見通しができる生活を！

子どもは、自信を持つと、それは大きな意欲につながります。できる力を喜びにします。誰かができたことを、みんなで共感しあうといいですね。「すてきね」のモデルを作れば、見通しが持てるようになります。「～したら～する」という見通しを作りたいです。そのために、園は、生活リズムが必要です。園の生活リズムをまず作ることで、子どもは自分の力を発揮できます。見通しができる子どもは自分で動けるようになるのです。

5 保育…友達との「楽しかった」感情共有を豊かに体験する

① 体や手先の発達を十分に

ダイナミックな動きを楽しむ経験をさせましょう。跳び越したり、潜り抜けたり、少し高い所をバランスとって歩いたりするなどの体を使った遊びを楽しみましょう。

また、水・砂・泥を使った遊びやはさみなどの道具を用いた遊びも取り入れ、体や手先を十分に使うようにしましょう。

② 本格的ごっこあそび

仲間と一緒に日常を再現したり、経験を表現したりする遊びをたっぷり楽しみましょう。憧れを創るような、生活や絵本の世界からの経験です。

また、わらべ歌や言葉遊びを通して、言葉によるやり取りを楽しんだり、簡単なルールのある遊びを通して勝ち負けを楽しんだりすることも大切です。

6 指導

集団教育の場である園で、全ての子が、わがままも含め、ありのままの自分を出せるようになりたいです。子どもが嫌そうな顔をしていたら、子どもが何も言わなくても「嫌なことがあった？」と尋ね、その表情から読み取ってあげましょう。子どもは、「わたしのことをわかってくれる先生だ」とわかれば、保育者を信頼し、それを土台にして仲間に向かっていきます。

気になる子がいた時に、その子の理解が難しく、怒らなきやいけない状況がうまれているとしても、それを怒っていたらその子にとっても周りの子どもたちにとってもよくない状況になります。その子を“特別な子”として見てしまうことになるのです。ですから、不適切な行為をしている子がいたら、その子には「こういう気持ちだったんだよね。でも、お口で言ってほしいよね。たたくのは嫌だよね。」と、言葉でやりとりをすることがとても大事だという集団ルールを伝えていきます。

子ども同士をつなぐことも大切です。つまり、「一緒に楽しい」という思いにすることです。喧嘩もそうです。個別に、その子にだけ指導をするのではなく、オープンにします。すると、「そうか。たたくのではなく、言葉で言わなきやだめなんだ。」ということを皆が度々勉強していくことになります。そうすることで、クラス集団の言語能力、つまりコミュニケーション能力がついていきます。

また、大人でも子どもでも、安心できる人がいることが大切です。不安な時には気に入った人が

ら離れません。そういう場合は、手をつないだり、だっこしたりしてあげます。

生活や遊びの中で何かができたと、「大きくなったね」「素敵だね」と、子どもの喜びを言葉にしてあげます。毎日そばにいる保育者にしかかけられない言葉があります。そこで見える子どもの変化を言葉にしましょう。

また、友達の姿から「やってみよう」とする憧れの気持ちを育てること、友達との関係の中で自信を育てること、ちゃんとできなくても、その子のやろうとする意欲を支えることを大事にしましょう。

ごっこ遊びは、保育者の豊かで柔軟な心が求められます。保育者が入ることで、子どもの、ぼらぼらの“つもり”をつなげていくのです。「ここでこれをやろう」ではなく、子どもなりの思いや表現に共感し、それぞれが持っているイメージをつなげるのが、保育者の役割です。

トラブルが起きた時、まだ、子どもは状況を正確には伝えられません。それでも、「嫌だったんだね」と、子どもなりの思いや言葉に共感してあげればいいのです。

子どもの思いはどれも独立型だから、いろんな子がいるけれど、それをつなげて「楽しいね」という思いにしていくことが3歳児の保育では大切です。

第9回 保育者資質向上研修会
平成28年12月14日
会場：焼津市総合福祉会館ウエルシップ